

知識社会における研究スキルと言語学習

どこに行っても役立つような知識を身につけなさい。
その国の言葉を知り、土地柄を知り、人々を知りなさい。
そうして身につけた知識をいつも持ち歩くのです。

A・ソルジェニーツィン

この私のお気に入りの一節は、反体制派に属した、著名なロシアの哲学者で作家でもあるソルジェニーツィンによるものです。この一節の根底に流れるのはまさに仏教の精神です。興味深いことに、偉大なロシア人の作家トルストイもまた、仏教に影響を受けていました。

私が1980年代から90年代にかけてオレゴン大学の政治学科で教授をつとめていたころ、我々は博士課程に在籍する学生に語学の必要性について何度も熱く語りかけたものでした。かねてからアメリカでは、博士号をめざす学生なら少なくとも一つは他言語を読んで自分の知識の範囲を広げ、異なる視点を獲得するように求められてきました。私も大学院生になった頃には、そういった必要性を感じてドイツ語学習に励んだものです。しかし、大学院生からは「古めかしい」要求にかなりの不満があったことも確かです。結果として、多くの大学院は修了要件を緩和してきました。学生は統計論・計量分析

または語学習得のいずれかを要求されるもの、すべてを修得する必要はなくなったのです。私は教授会で、統計学と同様に語学習得も学生には必要だと懸命に訴えてきたのですが、思いが通ずることはありませんでした。

オレゴン大学では、数年間にわたり国際研究科長も務めていました。アメリカが学生に母国語以外の言語を習得させようとしないうことを強く批判した、前上院議員ポール・サイモンの著書『舌たらずのアメリカ人(The Tongue-Tied American)』に共鳴した私は、(学部生・大学院生を含めた)全学生が少なくとも外国語の修得に3年間を費やすようにカリキュラムを改訂しました。さらに言うと、日本語、中国語、ベトナム語、タイ語のようにあまり一般的でない難解な言語の初歩的学習や、フランス語やドイツ語のような言語のさらに高度な習得に対して大学院の単位を与えるようにしました。そのような報奨なしには、大学院生がある程度真

剣に語学の学習に取り組もうとしなかつたからです。しかしながらこれは、結果として賢明な決断でした。競争の激しい就職の局面において、学生のキャリアと専門性の開発に重要なプラス要因となりました。

『距離の消滅』(ケアンクロス)した『フラット化する世界』(フリードマン)において文化交流と国際交流が盛んに行われる知識社会では、学生が外国語に熟達することは確実に必要です。外国語の知識とは、優れた院生にとって重要な研究スキルなのです。オーストラリアでは、喜ばしいことに、英語以外のヨーロッパの言語とアジア圏の言語の両方を学生に習得させることが標準になってきています。日本もまた同じようなスタイルにするべきでしょう。少なくとも一つのヨーロッパ言語と、中国語・韓国語・ベトナム語といったヨーロッパ圏以外の言語をもう一つ、学ぶようにするのがいいです。もう一つの論点は語学を効果的に教える教授法についてです。例えばタイでは何年にもわたって英語を勉強



第2回「院生のための大学教授法研修会」を開催

高等教育研究センターでは、名古屋大学の院生・TAを対象とした今年度2回目の大学教授法研修会を2006年11月15日(水)のランチタイムに開催しました(於:文系総合館7階オープンホール)。文、法、経済、国際言文、情報科学、環境学の6研究科から19名の院生が参加し、スナックやドリンクを楽しみながら、活発な意見交換を行いました。

今回の研修では、シラバス(授業計画)をどう書いたらよいかというテーマを設定し、2つのセッションを提供しました。最初のセッション「シラバスを書く前に必要なこと〜今日の大学生の学習状況と学習志向」(近田政博助教授)では、院生と学部生の学習志向の違いに注目し、大学生がどのように知的発達するかについて紹介しました。続いて「学習意欲を高めるシラバスの書き方」(鳥居朋子助教授)では、シラバスを書くことの意義、授業目標の表現方法などについて説明を行った後で、ミニ演習を行いました。

第1回(2006年9月29日)と併せて出席した院生には、戸田山和久センター長から修了証を授与しました。この研修は来年度以降も開催する予定です。(近田政博)

しているにもかかわらず、学生の語学熟練度は十分ではありません。世間の国々では文法上での訳し方ばかりを重視して、かえって大切なコミュニケーション能力を育み損なっています。株式会社ナイキの中国進出には、中国語を学んだことはなかったけれども日常会話においては中国語の優れた使い手が活躍しました。

アメリカのビジネススクールは、(たいていが文学者とポストモダニストにより占められているであろう)語学専門の学科が学生に提供する語学学習の質に失望し、最近では日本語や中国語のような言語を教え、会話能力と合わせて文化理解についても力を入れています。

現代の情報伝達技術(ICT)をクリエティブに活用し、体験しながら学習することに伴い、語学学習の質

の向上には大いなる可能性が秘められています。言語と文化はセットにして学ぶ必要があります。集中プログラムには相当な可能性があり、例えば中国の大学は今、真剣に取り組んでいます。こういった集中プログラムの成功が、さらに高度な語学教育を大学に求める結果となったのも興味深いことです。

大学院のプログラムが、革新的な知識生産者として卒業生が知識社会の中で働くことを真剣に求めるならば、できる限り高水準の研究スキルを提供することが必要です。それは、研究分野で外国語を駆使できることと、量的および質的研究手法についての厳密な知識を持つことの両方を含むのです。

(高等教育研究センター客員教授 ジェラルド・W・フライ)



高等教育研究センターでは本年3月10日(土)に「大学教育改革フォーラムin東海2007」を本学IB館にて開催いたします。

本フォーラムは、大学教職員をはじめ広く大学関係者が集い、大学教育の現状や目指すべき方向について議論することを目的としています。とくに東海地域の大学関係者の交流の場として活用していただければと思います。

ただいま参加のお申込を受付中です。本学関係者は参加費が割引になりますので、お誘い合わせの上ぜひご参加ください。詳細は高等教育研究センターのウェブサイトで(裏面参照)よりご覧いただけます。

○フォーラム参加お申込締切2月28日

かわらばんに皆さまの意見・感想をお寄せください

裏面のEメールアドレス宛にお願いいたします
記事の投稿もお待ちしています

Curriculum Glossary

カリキュラムにまつわる用語集

オナーズ・プログラム (Honors Program)

20世紀の初期に米国の大学ではじまったオナーズ・プログラム(優等生特別プログラム)は、英国の優等学位にならって設計されたと言われています。学士課程の中でも、成績優秀またはより専門性の高い学位に位置づけられる優等学位(honors degree)の取得を目指すプログラムです。受講生にはさまざまな特典(有名教授によるセミナーの優先受講権、各界の著名人を招いたセミナー兼昼食会への参加、有利な大学院進学条件、奨学金の優先支給など)が用意されています。選抜基準は、高校時代の成績や大学入学後の学業成績、本人の学習意欲の高さなど、大学や学部によってさまざまです。

オナーズ・プログラムは、優秀な学生、高い意欲を持った学生を集めて、かれらが切磋琢磨する機会を提供することに意義があると考えられています。たとえば、ミシガン大学アナーバー校文理学院カレッジでは、通常のプログラムと別にオナーズ・プログラムのカリキュラムを提供しているだけではなく、学生の学習活動や宿舎も分けています。一方、ノースカロライナ大学チャペルヒル校では、あえて別プログラムを設けず、通常のプログラムのなかで優等生に対しさまざまな選択肢や優遇措置を与える方式をとっています。どのような形態や方式をとるにしろ、学習意欲の高い学生の成長をより促すための教育機会として位置づけられています。

近年、日本の大学でも、独自の組織文化や文脈に合わせてオナーズ・プログラムの趣旨を採り入れ、学生の勉学意欲を励ますことを目的とした制度が多様な形で導入され始めています。たとえば、新潟大学では、「副専攻制度」としてオナーズ・プログラムを運用しています。同制度は、当該専門分野以外の特定分野科目を一定単位数以上取得した学生にその勉学の認証を付与する制度です。専門分野以外の分野について関心を持つ学生のモチベーションを組織的に高める仕組みだといえます。また、立命館大学経済学部では、2年次以降に受講できる独自プログラムとして、高度な専門領域を集中的・系統的に学ぶプログラムを開講しています。

名古屋大学では、学士課程から修士課程へ進学する学生が全体の約5割に達しています。「もっと高度な内容を学びたい」、「もっと専門性を深めたい」と考える学生たちの希望に応え、かれらの能力を最大限に引き出すためにも、名古屋大学にふさわしいオナーズ・プログラムのあり方を検討してみたいかがでしょうか。(鳥居朋子)

子どもの大学

昨夏、ドイツのチュービンゲン大

学で『子どもの大学(Kinder-Uni)』についてお話を伺う機会がありました。『子どもの大学』は、夏学期の2ヶ月ほどを使い、毎週同じ曜日の同じ時間に、同じ教室で、8歳から12歳の小学生を対象にした講義を行うものです。なんだ、日本でもやっているよ、と思われるでしょうか。でも、この『子どもの大学』は受講する子どもの数がなんと数百人、ときには千人を軽く超えることもあるという、「特大」講義なのです。しかも、2002年の夏学期に始まってから5年間、もともと参加者の少なかつた2006年6月(サッカーの

ワールドカップが行われていたとまででした。つまり、300人以上も集まっているのです。その大盛況には、もちろん秘密があります。

まず1つめは、参加する子どもが大学生気分を味わえること。学生証をもらい、保護者の入室が禁じられている大教室に陣取った子どもは、講義開始時刻から15分間ほど、待ちぼうけをくらいます。それがドイツの大学の流儀(Cum Tempore)だからです。講義がはじまると、面白いとき、賛同を示したいときなどに、机を拳で叩いてみせます。これもまたドイツの大学生の慣習を真似ているのだそうです。そして講義がおわると、メンザと呼ばれる学生食堂に向かい、本物の大学

生に交じって食事をとりまします。地元の新聞社が後援しているため、参加者は無料で食事ができるのです。

もちろん、講義する教員の側の工夫もあります。実物や模型、映像などを効果的に使うことはもちろん、歴史を語ると惹きつけやすいとか、(大教室なので)壇上にとどまらず子どもの視線をつかまえておく方がいいとか、5年間の経験を踏まえた授業のタイプスが共有されているのです。チュービンゲン大学では、『子どもの大学』の講師に選ばれることは今や名誉なことらしく、名乗りを挙げる教員が引きも切らないといえます。さぞかし講義の準備に余念がないのかと思いきや、それは人それぞれ。半年以上じつ

くり練る人もいれば、1週間くらいでパツと仕上げられる人もいます。子どものほうも、1時間以上もおとなしく座っていられたら、子ばかりではありません。常に4、5人の関係者が教室にいて、騒がしくなるとシイッと声を掛けるのだそうです。

頑張りすぎない、肩の力が程よく抜けた「大学開放」の活動に触れ、なんだかほっとして帰ってきたのでした。『子どもの大学』は今、ドイツ語圏の大学を中心に広がりを求めています。大学らしさを追求するこの活動、もしかしたら大学再考の良い機会なのかもしれません。(齋藤芳子)

読んでおきたい この1冊

Great Books on University

阿部真大著

『搾取される若者たちーバイク便ライダーは見た!』

集英社新書 2006年

2006年の流行語大賞のベスト10に「格差社会」が選ばれた。本書は、バイク便ライダーという最低賃金や労災保険が保証されない請負労働者の実態から、格差社会の労働・雇用問題に迫っている。著者は、自らの1年間にわたるバイク便ライダーの実体験をもとに、「なぜ若者たちが、知らず知らずのうちに、リスクの高いバイク便ライダーの仕事にのめり込み、ワーカホリックに陥ってしまうのか」を明らかにしている。そして、バイク便ライダーの職場を団塊ジュニア世代の縮図とみなし、若者たちが搾取される労働・雇用問題の構造まで論を展開している。

私がこの本を薦める理由はいくつかある。第一に、ワクワクしながら読めるからである。本書はすでに発表した2本の論文をもとにしているが、前半がバイク便ライダーの世界を追体験できる「体験版アトラクション」、後半がなぜ若者がワーカホリックになるのかを解く「謎解き」になっており、読者を引き込む工夫がされている。

第二に、授業で利用できそうだからである。私も来年度試そうと思うが、基礎セミナーの授業の導入として取り上げてみてもよいだろう。フィールドワークの進め方の参考にもなるだろうし、学問の楽しさを感じ

させられるかもしれない。また、この本は30歳の大学院生が書いたものだよと言って、刺激を与えるのもよいだろう。

第三に、大学教育を考えさせられるからである。近年、大学卒業後に企業に採用されても早期に離職する若者が増えているなどの理由から、大学教育の改善を求める声がある。それが、教育の側の問題なのか労働市場の側の問題なのかという議論もあるが、大学として「勇気ある知識人」の輩出に責任をもつには、このような労働の実態にも大学人は詳しくなる必要があろう。

第四に、大学という職場を改めて考えるきっかけになるからである。バイク便ライダーと大学教員を比較してみるのもおもしろい。両者は全く違うように見えるが、好きなことを職業にした者やワーカホリックな者が多いなどの共通点もある。バイク便ライダーの職場では若者が搾取されているようだが、はたして大学という職場ではどうなのだろうか。(中井俊樹)

高等教育研究センタースタッフ(2007年2月現在)

センター長 戸田山 和久
 専門領域: 科学技術社会論
 教授 夏目 達也
 専門領域: 高等教育学、技術・職業教育論
 助教授 近田 政博
 専門領域: 比較高等教育学、初年次教育
 助教授 中井 俊樹
 専門領域: 大学教授法、高等教育マネジメント

助教授 鳥居 朋子
 専門領域: 高等教育カリキュラム論、教育経営学
 助手 齋藤 芳子
 専門領域: 科学技術と高等教育、科学技術社会論
 専任職員 井上 和美
 事務室連絡先: 052-789-5696
 ホームページ <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>
 E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp

<外国人客員教授>
 ジェラルド・フライ (2006年10月~2007年3月)
 ミネソタ大学教育人間発達学部教授(アメリカ合衆国)

<平成18年度 国内客員教授>
 馬越 徹 桜美林大学 大学教育研究所 所長
 小笠原 正明 東京農工大学 大学教育センター 教授
 吉田 文 メディア教育開発センター 教授